

【佳作】

見えない

黒田 智子（兵庫県 兵庫県立姫路西高等学校 1年生）

雲一つない空を見上げては UFO を探すような子どもだった。しかし何かを見て抱いた淡い期待は、大抵鳥や飛行機に裏切られる。そういうことを繰り返すうちにいつしか空を見上げることさえなくなってしまった。

あまりの暑さに眠れなかった幼い日の夏の夜。父と母の寝息と遠慮のない蛙の声だけが静まりかえった家の中に響いていた。ふと暗闇を意識する。闇に対する本能的な恐怖と自分の弱さが、得体の知れない何かを想像させた。怯えたところで何かがいたためしはないのだけれど。

あの頃の私にとってそれらはどういふ存在だったのだろうか。彼らは得体が知れない恐怖の塊だった。それでいてなぜか好奇心をそそれれ、会いたいけれど会いたくないという不思議な気持ちにさせられた。私の日常に平然と居座っていたように思う。家のあらゆる闇に住んでいと信じて疑わなかった。押し入れやタンスの影、ベッドの下など闇はどこにでもあった。一人でいるとき、好奇心は恐怖に負けた。一人でいるときの暗闇ほど怖いものはないかかった。

闇というのは不思議だ。少し夜更かしして親に、「寝ない子の

ところにはおぼけが来るよ。」と脅されしぶ布団に入ったあの頃、闇は濃かった。何かが潜んでいても不思議ではないほどに。しかしいざ布団に入ると今度は闇のせいで眠れない。助けるのか邪魔をするのか、闇は気まぐれで面白いものでもある。

しかしそんな闇が徐々に変化しているように思う。整備された街灯の人工的明るさが駆逐し、同時に引き立てる闇ではあるが何かが違う。確かに科学はたくさん不確かなもの正体を明るみに出した。真実あるいは事実を覆っていた闇が取り払われつつある。人々はすべてを知ったつもりになり、傲慢にもなった。未知にかかる闇が薄れるのに比例して、別の闇が濃くなってしまったように感じる。

私は高校生になった。高校生がこんなに多忙だとは幼い頃の私も思いはしなかっただろう。現実を見なさいと言われる。現実についていかなくってはならないと思う。目の前の現実に対処するのに精一杯の私に「寝ない子どもを怖がらせるおぼけ」を気にする余裕などない。

かつて人々は姿の見えないものを恐れ、敬い、名を付けた。生活の節目節目にもてなし鎮魂や感謝のための祭礼も行ってきた。それらと共に生きてきたのだ。

私もそうだった。闇にうごめく何かの気配を感じていたように思う。そしてそれらは一体何なのかという疑問をいつも持っていた。怖いけれども魅力のある何か。それに私は惹かれていた。しかし今はそれらは存在するのを考えている。今の私は闇が怖くない。幽霊も宇宙人も、共に生きる存在ではなくなってしまったようだ。

いつ、どこで、どうして、不確かなものを信じる心を失ってしまったのだろうか。失ったというより捨ててしまったのかもしれない

い。闇を怖がらなくなった私は、大切なものを失くしたような気がしている。喪失感、闇への恐怖が薄れるにつれて濃くなっている。

いつのまにか追い出してしまったあの日の私はいつか戻ってき
てくれるだろうか。もっと心に余裕を持つべきだったのだ。すべて完璧にやらなくてはいけないと思いついてる私がいた。もう少し肩の力をぬいてもよかったのかもしれない。

あの頃のように空を見上げてみよう。闇を見つめてみよう。大人になっても子どもができて。

明日からも慌ただしい日々が続く。ふと、夜空が見たなくなった。何かが瞬く。飛行機だった。なんだ、と思う。こんなことに落胆した自分が意外で、自分が自分でないような感覚に陥る。その時ほんの一瞬、幼い日の私の心配がしたような気がした。